

齲蝕図像以前に歯の観察図＝口腔解剖図譜そのものが少なかった。その数少ないなかでレオナルド・ダ・ヴィンチの「解剖手稿」(1489)に歯の観察図があることはよく知られている。またヴェサリウスの「ファブリカ」(1543)は歯髓腔を描いた最初の図と言われる。我が国では整骨医の各務文献の「各骨真形図」(1810)が、写実的な口腔解剖図譜として評価が高い。だが江戸時代の歯科、口中科の口腔医学秘伝書に正確に描かれた歯の解剖図を見出す事は難しい。まして齲蝕図像はほとんど存在しないのではなかろうか。江戸時代の齲蝕治療は、鎮痛服薬か拔牙しかなかった、と考えると齲蝕図像がない理由も納得できる。

明治以降は西洋歯科医学への転換にともなって保存治療学が導入され、齲蝕図像の必要性が高まってきた。しかしその齲蝕図像は外国図書の図をそのまま模写転用したものが多く、我が国の古代型、近代型齲蝕の病態を反映した図像ではない。それでも今回調べた範囲では、明治から大正・昭和と時代が下がるにつれて、近代型＝咬合面齲蝕図像が増加してくるという大きな流れは読み取ることができたと思う。

まとめ：古代型齲蝕から近代型への病態変化にともない、それを描いた齲蝕図像にも変化が見られるだろうとの仮説に基づいて、図書、ポスターの類を可能な限り渉猟したが、その傾向を不十分ながら大きな流れとしては捉えることができた。

22) 『病草紙』にみられる絵図の連続性の研究

Studies on the stream of Picture in Yamainosōsi

医の博物館 西巻 明彦
日本歯科大学 屋代 正幸

Akihiko Nishimaki, Museum of Medicine and Dentistry
Masayuki Yashiro, Nippon Dental University

『病草紙』が現在伝承されている関戸家本は、現在21段が確認されている。この21段が制作時どのような関係にあったのか不明である。小松茂美氏によれば、江戸時代の模本に、①侏儒、②僵僕、③乞食法師、④白子の女、⑤赤鼻の親子、⑥二形

の男、⑥口より尿を吐く男、⑦霍乱の女、⑧陰虱をうつされた男、⑨痔瘻の男、⑩白内障の男、⑪歯周病、⑫重舌の男、⑬風病、⑭顔にあざのある女、⑮不眠症の女、⑯居眠りの男、⑰口臭の女の順番に並んでいたと言う。

『医心方』は、病門ごとに疾患が分類されており、『医心方』を『病草紙』がある程度参考しているならば、ある程度中国伝統医学の理論にそってまとめられていることが推察される。中国伝統医学の概念で①～⑰の関係を考察すると、①から⑥までは外形の異常、④から⑫までは九窮の疾患、⑩～⑰までは上焦の疾患に分類される。このことは、歯科、口腔領域の疾患が『病草紙』に比較的多く残っていることは、たまたま上焦の疾患、九窮の疾患が伝存したためと考えることができる。

また、⑮不眠症の女と⑯居眠りの男が対となっている。大和絵は一つの技法として陰と陽が一对となる構図が存在する。素問によれば「陰陽はすべからず離れ難し…陰平らかにして陽秘なれば乃ち精神納まり、陰陽離決すれば精神乃ち絶える」と述べられており、中国伝統医学的解釈によれば、日中は陽気が主であり、夜になると陰気が交代して眠りに入る。現代医学的には、交感神経と副交感神経の考えに相似する。この陰陽の気が上手にゆかないと不眠が生じると考え、陽気が過剰でも陰気が不足していても不眠となる。不眠は精神活動を主る心の症状であり、心以外の臓器の異常が心に影響して不眠となる。治療法としては陽が過剰ならば瀉し、陰が不足していたならば補することとなる。『病草紙』の不眠の女は、夜、陰の時期になっても眠れない女を図示し、居眠りの男は陽の時期であるにもかかわらず眠り込む男を絵画化していることは、対称的で明らかに対となっており、連続性を示している。絵巻物は本来左から右に向って画面が進み、前断と後断では何らかの関係性を有することが多い。

この連続性の概念で考えるならば⑪歯周病、⑫重舌の男も関係性を有する。歯周病の詞書きに「男ありけり。もとより口の内の歯、皆揺ぎて、少しも強き物などは、噛み割るに及ばず。なまじいに、落ち抜くことはなくて、物食ふ時は障りて耐え難かりけり。」とあり、重舌のある男の詞書きには「重舌といひて、舌の根に小さき舌の様な

るもの重なりて生い出づることあり。病重くなりぬれば、腹には飢えたりといえども咽喉飲食を受けず。重くなりぬれば、死ぬるものなり。」とあり、両者にこの詞書きからは関係性を見出すことはできない。しかし、重舌がもし口腔底蜂窩織炎であるならば、歯周病が原発で口腔底蜂窩織炎を発症させ、二重舌の症候を呈することがある。また、症例報告によれば来院3日目に縦隔部まで炎症、膿が波及して死に至った例も報告されていることから、歯周病、重舌の男の詞書きは、両者ともこれに対応する。このことから、歯周病と重舌の男も連続性を有していることが判明する。

このような関係性は⑬風病の男、⑭顔にあざのある女で顔面部の外形異常で男と女で対を示しているし、⑤二形の男、⑥口より尿をする男は、陰部の先天障害を示すことで対をなしている。このことは、『病草紙』の絵図は、互いに関係性がないと考えられてきたが、何らかの物語性も有していることが推察される。

鳥目の女、肥満の女、脊椎障害の男、小法師の幻覚をみる男については、寸法の差が異なり、この『病草紙』とは異なる異本と考えることができる。鳥目の女、肥満の女、脊椎障害の男は寸法が同じことから、肥満の女、脊椎障害の男は、外形障害に、鳥目の女は九窮の部分に存在し、江戸時代以前に切りはなされたことが想像される。

以上のことから、江戸時代十七図一卷に模写された絵巻物は、連続性の概念から考えるならば、後白河法皇が制作した時代の配列に近似していると考えることができる。

23) 病草紙と刷掃指導 (その2)

Studies on the Tooth Blushing in Yamainosōsi

医の博物館 西巻 明彦
日本歯科大学 屋代 正幸

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*
Masayuki Yashiro, *Nippon Dental University*

病草紙は、後白河法皇制作説が近年定説化している。病草紙に関する論考は六道絵として考えるか、六道絵ではないと考えるか、病の同定、医心

方の絵画化、風俗史、差別史など多数存在している。病草紙とよばれる作品の分類について佐野みどり氏は①関戸家本(15段)、②断簡(白子、侏儒、背骨の曲がった男、肥満、鶏に目をつかせる女、小法師の幻覚を生ずる男)、③断簡(鍼治療)、④異本病草紙(模本)、⑤新撰病草紙(16段)と分類される。今回、①の他に関戸家本に近いと考えられる②についての合計21段について採り上げた。

病草紙は病が主題である。そのため、主題を観者に明示させる必要がある。そのため、絵図の中に、指先、視線などの装置が必要となる。口臭の女の場合、3人の女性が描かれ、画面左下の女性は鼻をふさぎ、くさいという所作を示している。右手の女が口臭の女性で、左手に房楊枝を持ち、手前にはうがい茶碗が置いてある。お歯黒道具が見られないことから間違いなく房楊枝でブラッシングを行っているところである。医心方巻5治牙歯痛方第66に口臭時、刷掃を行うことで口臭を治す方法が記載されている。左上方の女性は、背をやや下に向け、指先で何やら指示を行っている。この指先の方向性は口ではなく、手に向っており、視線も手に向っている。このことから、左上の女性は口臭を指し示しているのではなく、みがくことで口臭をとることを勧めていると考えられる。詞書きには、「宮こに女あり。みめかたち、髪姿あるべかしかりければ、人雑士に使ひけり。他所に見る男、心を尽くしけれども、臭の香あまり臭くて、近づき寄りぬれば、鼻を塞ぎて逃げぬ。ただ、うち居たるにも、傍らに寄る人は、臭さ耐え難かりけり。」とあり、口臭がはげしいことだけを強調している。このことから、詞書きにはないものの、絵画分析により、左上の女性は今日で言う刷掃指導を行っていると考えることができる。刷掃指導を行っている場面の絵画は珍らしく、日本最古の刷掃指導を行っている絵画と思われる。